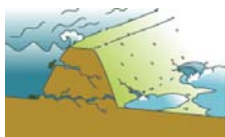


# 今こそやろう減災式

今回は、「防災の輪を広げるコツ」を防災逸話の中から、減災式を考えてみましょう。

昔々あるところに、毎年毎年、繰り返される水害に悩まされた地域がありました。その対策として、川に土手を造り水害に備えることにしました。ところが、



しっかり造ったはずの土手が翌年の出水期（梅雨）を向かえると決壊してしまうのです。その原因を調べた

結果、しっかり固めたはずの土手に小さな素穴が開き、土手を決壊させてしまうと判明しました。

なぜしっかり造ったはずの土手に素穴が開くのだろうか？お役所様は知恵のある者を集めて調べました。

「造ったその年は大丈夫。ところが翌年になると穴が空く」なんと答えは、土手の土の中に含まれる水分が

原因であると判ったのです。土手を造り直した年は、多くの水量にも耐える。ところが、多い水量に耐えている間に土手が保水をしてしまう。その保水した土手の土は、その年の冬に凍てつき膨張するのです。それが春になり、春の穏やかさで凍てついた氷は溶け出し、土手の中の水分は外部へしみ出ます。結果、土手の内部に残るのは、凍てついて膨張している間にできた小さな素穴です。原因が判れば、対策は簡単！「翌春にもう一度、固め直せば良いのだ」と考えました。

しかし、造り直した土手は、今までよりも大きな圧力を掛けないと土を締め固めることができないことが判かりました

そこで、お役所様は人をたくさん集めて踏み固めてもらおうと考えたのです。お役所様は、地域の人たちに次の『おふれ』を出しました。

『この町に住むもの全員、〇月〇日に土手に集まりなさい。水害対策の為に全員で土手を踏み固める。お役所より』と呼びかけたのです。そしてその日が来ました。ところが待てども、暮らせども、町の人たちは集まりません。お役所様は「なぜ？集まらないの？いのだろうか？」と悩み、その答えが『自分ひとりくらい、うちの家族くらい行かなくても大丈夫だ。誰かが行くだろう』と、町の全員が思ってしまった集団的手抜き事件の発生だったのです。

そこで、知恵のある者が「真っ正面から災害対策を語るからダメなんだ！」と。みんなは口々に「じゃあ、どうすれば良いのかね？」すると、知恵のある者がこう言いました。

「春先に花の咲く木を土手の周辺に植えてください。例えば、桜の木なんてえのも良いですね！」再び問いました。「春先に、花の咲く木を植えてどうするのかね？」知恵のある者が「花が咲きだしたら、みんなで花見大会

をしましょう。飲んで、唄って、踊って、みんなで楽しむのですよ」みんなは疑問を感じながら「そんなことで人は集まるのかねえ？災害対策のためと言っても、みんな集まらないのだぞ！そんな馬鹿げたことは実にけしからん！」再び、知恵のある者が「とりあえずやってみましょう。やってみてからお叱りを受けます。それからお役所様のお願いがあります。お祭りになりますから、歌ったり、踊ったりで上手だった人たちに美味しいお酒を振る舞ってあげてください。子どもたちやお酒の飲めない人たちには美味しいお菓子を振る舞ってください！」その意見に対し、お役所様が言いました。「そんなことで大丈夫なのか。もしも、ダメだったら誰が責任をとるのかね？」知恵のある者は最後に「もしも、人が集まらない時は、私を煮るなり焼くなりしてください」その覚悟を聞き、さすがにお役所様も「そこまで言うなら用意をしてやろう」と花見大会を計画したのです。

翌年の春、昨年に植えた小さな桜にかわいい花が咲きました。そして、お役所様から次のような『おふれ』が張り出されたのです。

『〇月〇日に土手で花見大会を執り行う。上手、下手にかかわらず歌って踊れるものには、褒美として、酒または菓子を振る舞うこととする。家族から何人出ても良し。お役所より』

当日、花見大会は朝から町中の人が、土手に溢れかえるほど集まり、花見大会の見物客も、ゴザやむしろを広げてワイワイガヤガヤ、歌えや踊れの大騒ぎで一日中、町中の人たちが、知らず知らずのうちに土手を踏み固めてくれたのです。ところが驚いたことに翌日も、その翌日も花が散るまで、多くの人が土手で花見を楽しんだのでした。

その結果！その年からは出水期の梅雨や台風時期になっても、土手は決壊せず、みんなが安心して暮らせるようになりました。めでたしめでたし（完）

これは、防災逸話「土手の花見」のお話です。ハードウェアの「土手と桜の樹」にソフトウェアの「花見イベント」という「楽しさ」を兼ね備えた活動で、防災活動を長期継続的な文化とさせることの重要性を説いています。防災を生活文化に組み込み安定させることで、長期にわたって継続され、人材（世代）が変わっても残るものを、ハードとソフトに加えて社会的な仕組みの整備が重要だとしています。更には「おまけ」をつけた楽しいイベントにすることで、企画から運営、そして実行に繋げる、なんともワクワクする備えの面白さを秘めた、防災活動の醍醐味ともいえるのです。

真っ正面からの防災活動は「人が逃げるだけ！」防災活動は「したたかに知恵を使う」これが今回の減災式です。「楽しくなければ防災の輪は広がらない、楽しく防災活動をやろう！」まずは「あいさつ運動」から！

をしましょう。飲んで、唄って、踊って、みんなで楽しむのですよ」みんなは疑問を感じながら「そんなことで人は集まるのかねえ？災害対策のためと言っても、みんな集まらないのだぞ！そんな馬鹿げたことは実にけしからん！」再び、知恵のある者が「とりあえずやってみましょう。やってみてからお叱りを受けます。それからお役所様のお願いがあります。お祭りになりますから、歌ったり、踊ったりで上手だった人たちに美味しいお酒を振る舞ってあげてください。子どもたちやお酒の飲めない人たちには美味しいお菓子を振る舞ってください！」その意見に対し、お役所様が言いました。「そんなことで大丈夫なのか。もしも、ダメだったら誰が責任をとるのかね？」知恵のある者は最後に「もしも、人が集まらない時は、私を煮るなり焼くなりしてください」その覚悟を聞き、さすがにお役所様も「そこまで言うなら用意をしてやろう」と花見大会を計画したのです。

翌年の春、昨年に植えた小さな桜にかわいい花が咲きました。そして、お役所様から次のような『おふれ』が張り出されたのです。

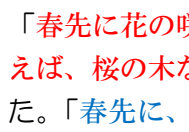
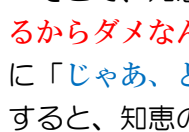
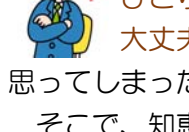
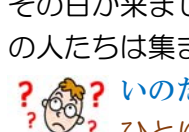
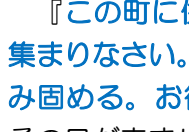
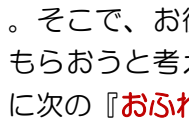
『〇月〇日に土手で花見大会を執り行う。上手、下手にかかわらず歌って踊れるものには、褒美として、酒または菓子を振る舞うこととする。家族から何人出ても良し。お役所より』

当日、花見大会は朝から町中の人が、土手に溢れかえるほど集まり、花見大会の見物客も、ゴザやむしろを広げてワイワイガヤガヤ、歌えや踊れの大騒ぎで一日中、町中の人たちが、知らず知らずのうちに土手を踏み固めてくれたのです。ところが驚いたことに翌日も、その翌日も花が散るまで、多くの人が土手で花見を楽しんだのでした。

その結果！その年からは出水期の梅雨や台風時期になっても、土手は決壊せず、みんなが安心して暮らせるようになりました。めでたしめでたし（完）

これは、防災逸話「土手の花見」のお話です。ハードウェアの「土手と桜の樹」にソフトウェアの「花見イベント」という「楽しさ」を兼ね備えた活動で、防災活動を長期継続的な文化とさせることの重要性を説いています。防災を生活文化に組み込み安定させることで、長期にわたって継続され、人材（世代）が変わっても残るものを、ハードとソフトに加えて社会的な仕組みの整備が重要だとしています。更には「おまけ」をつけた楽しいイベントにすることで、企画から運営、そして実行に繋げる、なんともワクワクする備えの面白さを秘めた、防災活動の醍醐味ともいえるのです。

真っ正面からの防災活動は「人が逃げるだけ！」防災活動は「したたかに知恵を使う」これが今回の減災式です。「楽しくなければ防災の輪は広がらない、楽しく防災活動をやろう！」まずは「あいさつ運動」から！



しかし、造り直した土手は、今までよりも大きな圧力を掛けないと土を締め固めることができないことが判かりました

そこで、お役所様は人をたくさん集めて踏み固めてもらおうと考えたのです。お役所様は、地域の人たちに次の『おふれ』を出しました。

『この町に住むもの全員、〇月〇日に土手に集まりなさい。水害対策の為に全員で土手を踏み固める。お役所より』と呼びかけたのです。そしてその日が来ました。ところが待てども、暮らせども、町の人たちは集まりません。お役所様は「なぜ？集まらないの？いのだろうか？」と悩み、その答えが『自分ひとりくらい、うちの家族くらい行かなくても大丈夫だ。誰かが行くだろう』と、町の全員が思ってしまった集団的手抜き事件の発生だったのです。

そこで、知恵のある者が「真っ正面から災害対策を語るからダメなんだ！」と。みんなは口々に「じゃあ、どうすれば良いのかね？」すると、知恵のある者がこう言いました。

「春先に花の咲く木を土手の周辺に植えてください。例えば、桜の木なんてえのも良いですね！」再び問いました。「春先に、花の咲く木を植えてどうするのかね？」知恵のある者が「花が咲きだしたら、みんなで花見大会

をしましょう。飲んで、唄って、踊って、みんなで楽しむのですよ」みんなは疑問を感じながら「そんなことで人は集まるのかねえ？災害対策のためと言っても、みんな集まらないのだぞ！そんな馬鹿げたことは実にけしからん！」再び、知恵のある者が「とりあえずやってみましょう。やってみてからお叱りを受けます。それからお役所様のお願いがあります。お祭りになりますから、歌ったり、踊ったりで上手だった人たちに美味しいお酒を振る舞ってあげてください。子どもたちやお酒の飲めない人たちには美味しいお菓子を振る舞ってください！」その意見に対し、お役所様が言いました。「そんなことで大丈夫なのか。もしも、ダメだったら誰が責任をとるのかね？」知恵のある者は最後に「もしも、人が集まらない時は、私を煮るなり焼くなりしてください」その覚悟を聞き、さすがにお役所様も「そこまで言うなら用意をしてやろう」と花見大会を計画したのです。

翌年の春、昨年に植えた小さな桜にかわいい花が咲きました。そして、お役所様から次のような『おふれ』が張り出されたのです。

『〇月〇日に土手で花見大会を執り行う。上手、下手にかかわらず歌って踊れるものには、褒美として、酒または菓子を振る舞うこととする。家族から何人出ても良し。お役所より』

当日、花見大会は朝から町中の人が、土手に溢れかえるほど集まり、花見大会の見物客も、ゴザやむしろを広げてワイワイガヤガヤ、歌えや踊れの大騒ぎで一日中、町中の人たちが、知らず知らずのうちに土手を踏み固めてくれたのです。ところが驚いたことに翌日も、その翌日も花が散るまで、多くの人が土手で花見を楽しんだのでした。

その結果！その年からは出水期の梅雨や台風時期になっても、土手は決壊せず、みんなが安心して暮らせるようになりました。めでたしめでたし（完）

これは、防災逸話「土手の花見」のお話です。ハードウェアの「土手と桜の樹」にソフトウェアの「花見イベント」という「楽しさ」を兼ね備えた活動で、防災活動を長期継続的な文化とさせることの重要性を説いています。防災を生活文化に組み込み安定させることで、長期にわたって継続され、人材（世代）が変わっても残るものを、ハードとソフトに加えて社会的な仕組みの整備が重要だとしています。更には「おまけ」をつけた楽しいイベントにすることで、企画から運営、そして実行に繋げる、なんともワクワクする備えの面白さを秘めた、防災活動の醍醐味ともいえるのです。

